

FD 通信 No. 1 3

飯田女子短期大学 FD 委員会

<http://www.iidawjc.ac.jp>

各学科専攻の取り組みを共有する

FD 委員長 三浦弥生

現在もなお収束をみせない新型コロナウイルス感染症はこの一年、人と人との様々なコミュニケーションを自粛せざるを得ないという、本学五十余年の教育の歴史の中で経験したことのない状況をつくり出しました。そのような中であって『うつしく生きる』を建学の精神に掲げる本学は、地域にある実習関係機関、学生や保護者の理解や協力を得る中で、教職員の知恵と工夫により学生の学習成果を落とすことのない教育活動に取り組んできました。課題こそあれ、前例に乏しく情報が錯綜する中、即決断を迫られる状況下での種々の教育活動は、実に評価に値するものではなかったでしょうか。

さて、昨年の FD 活動では「学習成果の可視化」をテーマに据え、松本大学短期大学部の糸井重雄先生のご講演をいただきました。その折、先生が言われた「皆さんはもうすでに学習成果の可視化にしっかりと取り組んでいます」という言葉は、本学の教育活動の取り組みの中に、確かに「学習成果の可視化」があることを私たちに認識させてくださいました。

そこで、今年度の FD 研修会では各学科専攻が取り組んでいる「学習成果の可視化」を報告し合うことで、本学の「学習成果の可視化」への取り組みを教職員間で再確認することを目的としました。この研修会を終え、各学科専攻の様々な取り組みを知り参考になったという意見が多くある中で、「目に見えない学習成果」をどのように捉えるか、という学習成果の評価に対する課題も提示されました。

また、この研修会は感染症対策の一環として今年度本学が導入した Teams の体験も兼ねる目的でリモート研修会としました。途中にあったリモート上のトラブルも、今後遠隔授業等を行う上での貴重な参考になったかもしれません。

教育活動は今、学習成果を獲得するための学生主体の能動的な学びの提供に加え、このコロナ禍において加速した遠隔授業のように、その環境に適した教育方法の構築も求めています。FD 委員会では、社会や地域、環境が求める教育活動の動向を正確に捉え、前向きで効果的な FD 活動を進めていきたいと考えています。

目 次

各学科専攻の取り組みを共有する	FD 委員長 三浦弥生	ページ 1
<FD 研修会> FD 研修会報告	FD 委員 遠山清香	ページ 2
幼児教育学科 尾高慶彦 / 看護学科 柄澤八代衣		ページ 2～3
<特集 1: 公開授業・授業改善アンケート・学習成果への取り組み>		
食物栄養専攻 岩瀬彩香 / 看護学科 下村美枝子 / 幼児教育学科 中本貴規		ページ 3～4
<特集 2: 新たな取り組み>		
マイクロソフト Teams (Office365) の導入と今後の活用の可能性について	事務局長 矢澤庸徳	ページ 5
キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果	教務課長 山口正之	ページ 6

<FD 研修会報告>

今年度の FD 研修会では、新型コロナウイルス感染拡大防止のため Teams を用いたオンラインでの実施となりました。昨年度の講演会の内容をふまえて「学習成果の可視化の実際～各学科専攻の取り組みから～」のテーマで行われました。FD 委員長から今年度の FD 委員会の活動と今後の改善点、各学科専攻の先生方から学習成果の可視化の取り組みについて、お話いただきました。お話を聴く中で学習成果の可視化の取り組みは、建学の精神、ディプロマ・ポリシーに向かって知識・技術を身につけ、人として成長する過程を学生と教員が共通認識できるツール、過程を振り返ることができるツールであり学生の達成感につながるものであると感じました。課題として、できたことばかりに意識を向けるのではなく目標に到達するまでの過程を大切にしていけるように意識していきたいと感じました。さらに、課題をふまえ学習成果の可視化を進めていくことで学習効果だけでなく、学生と教員間の関係性も高めていけるのではないかと思います。また、各学科専攻が、どのようなカリキュラムで構成され授業や実習を展開しているのか、学生と関わっているのかについても、具体的に知る機会となりました。各学科専攻で専門性の違いはありますが、学生の学びがより良いものとなるよう、お互いの取り組みを共有していく機会が今後必要であると思います。

今回の研修では Teams を初めて使用し実施しました。感染症の状況が今後も予測できない中、オンラインでの授業や会議の方法も検討していく良い機会となったように感じます。今後も多様化するツールを柔軟に使用できるよう備えていく必要性も感じました。オンラインでの実施は約 50 名と多くの方が参加でき、参加しやすい形態でした。発表してくださった先生方、参加してくださった皆様、ありがとうございました。

(文責 遠山清香)

「FD 研修会に参加して」

幼児教育学科 尾高慶彦

今年度は「学習成果の可視化の実際～各学科専攻の取り組みから～」と題し、FD 研修会が実施された。各学科専攻での取り組みは、その特色に応じて違いがあり、工夫の仕方も異なっている。共通していえるのは学生が学んできた成果を一目で振り返り、これからの目標を明確にしやすいことにあると考える。

学生が成長を実感しやすい場面の一つに実習がある。実際に困難に直面し、乗り越える過程で自己を振り返ることに繋がり、成長できたと感じるからである。しかし現状として、日々の授業でそれを感じることは少ない。それを可視化するためには、積み重ねてきた成果を系統的に示す必要がある。今、学んでいることはどこに結びついているのか、実践の場でどこに役立つのかといった先を見通しながら自己を振り返る環境を構成することが重要だと改めて感じた。今年度の自身が行った授業を見直すと、科目の中で到達目標を決め、その目標に向かって進めてきた。その一方で、各科目における縦や横への繋がりを意識していなかったように感じている。科目同士の繋がりを理解し、授業を展開する。そして、学んできた過程をより分かりやすく伝えることで、学生はこれまでの学びを捉えやすくなり、意欲を高めていくと考える。時には、図や絵を取り入れながら成果を示すことも分かりやすさという点において効果的であるため、取り入れていきたい。

短期大学での学習成果を可視化することは、絶えず自己を振り返り、成長を実感することに繋がる。こうした一連のサイクルを通じて安心して学びを続けることができる。自身の目指すべき姿を思い浮かべ、そのための道筋をはっきりと示すためにもこれからも取り組んでいきたい課題である。



「本学における学習成果の可視化の取り組みから」

看護学科 柄澤八代衣

FD 研修会に参加し学習成果の可視化をすることが、本学の教育の質、独創性を示すものであるという FD 委員長の言葉を受けて、各学科専攻の取り組みの発表を聞くことができた。

学習成果の可視化として、制作物や実技からのパフォーマンス評価や学習到達度を学習者自身が確認できるものなど知識として知っているにとどまらず習得できることに重きがおかれていることを感じた。知識の持つ意味へと深まることが、思考力・判断力・表現力を育成すると言われていることから習得することが大切である。しかし、習得においては「できる」と「わかる」のちがいがあり、「できるだけではだめわかっていなくては」または、「わかるだけではだめできなければ」というものがある。実際に臨地における看護学実習指導の場面で、知識はあるが実践で活用できない学生。または、実践はできるが知識が乏しい学生がいる。学習者の学習改善につなげていくための有効な情報を引き出し、習得を目指した結果、学習者本人が習得したことを自覚できると感じる。そして、断片的な知識・技能の習得だけではなく、総合的に活用して自分なりの創意工夫が盛り込める力を身に付けられると考える。しかし、この学習を「何のために、何をめざしてやっているのか」、目的・目標がみえにくいときにはやる気がでないことになる。目標のある営みには必ず評価があるため、PDCA サイクルが教育の世界でも強調されている。学習者に本来の学習目標に向かわせ、必要なフィードバックを与えるためにも学習成果の可視化は大切であると感じた。

教育の現場では、客観的で数量的な効果検証が常にできるわけではないといわれているが、学生自身が自分の成長を確認できることで主体的な学習への動機づけになる。学習成果の可視化が本学の学生主体の能動的な学びにつながっていることが理解できた。

<特集 1：公開授業・授業改善アンケート・学習成果への取り組み>

FD 活動に対する思いをご紹介いただくコーナーです。

授業改善アンケートを実施して

食物栄養専攻 岩瀬彩香

—「栄養学実習」3 年間のまとめ—

自分が授業を担当するようになって 3 年が経とうとしています。1 年目から食物栄養専攻 2 年生の卒業必修科目である「栄養学実習」の授業改善アンケートを実施しています。

この授業では、講義や調理実習の内容を自分でまとめることでより理解を深めてもらうために、ほぼ毎回レポート（プリント 1 枚分）の提出を課していますが、1 年目の中間アンケートでは「課題が多い」という意見が散見されました。自分の感覚では決して多くはないと思っていたので、正直この意見を見たときは驚きました。反対に、「課題があるから理解が深まる」という意見もありました。これらの意見を見て、課題が単純に多いということではなく、「なぜやるのか」をしっかりと理解していない学生が複数人いるのだと気が付きました。それからは「課題を減らす」のではなく「目的の説明」を丁寧に行うようにしました。以降、このような意見は見られなくなり、課題に対して肯定的な意見を多く目にするようになりました。

授業改善アンケートには普段は聞けない学生の本音が書かれていることもあり、自分では気が付くことができなかった課題に向き合う機会となっています。そしてこの取り組みは、教育の質の向上ならびに学生の学習意欲の向上に結び付いていると考えます。意識次第で取り組み状況は変わってきます。学生のやる気を引き出し、学ぶことの楽しさを感じられるような授業を作れるよう、日々努力していきたいと思います。

公開授業を参観して

看護学科 下村美枝子

看護学科基礎看護学領域では、就職した最初の年には基礎看護学領域すべての講義・演習を参観します。先生方の授業を参観することで、授業の狙いをどこに定めるのか、それを達成するためにどのような目標を立てどのような指導内容を設定しているのかを学びます。このことは、自分の授業設計にとっても役立ちました。そして、学科の枠を超えた授業参観は、看護学科のカリキュラムを認識・理解し、自分の担当科目との関係や位置づけの再確認に繋がりました。

坂上先生の基礎コミュニケーションは、コラージュを作ることで自分の心の状態を把握するという授業でした。看護師には欠かせないコミュニケーション能力は、とかくコミュニケーションの技術や手法を重要視しがちですが、他者の中の自分を知ることで患者とのコミュニケーションも発展できるのではないかと学ばせていただきました。外部講師の参観依頼による小児臨床看護論は、現役医師による専門的な疾患が主でした。疾患と看護をどう繋げるかは、今後の教員の課題だと感じました。矢澤先生の老年看護学では、学内演習の患者役兼、授業参観をさせていただきました。学生に学習効果のある事例設定や演習内容はとても参考になりました。コロナ禍で臨地実習が行えない現状は今後も続く可能性があり、基礎看護学領域にとっても今後の課題です。また、バイタルサインの測定や車いすの移乗など基本的な知識や技術の習得が各論には必須で、学期をまたいでもこれらが定着できる授業設計が必要だと痛感しました。

教育効果が高められる授業設計は、教員にとって生涯の課題だと考えます。授業参観は、教員としての成長・成熟に欠かせないものだと思います。

学習成果の取り組み

幼児教育学科 中本貴規

学習成果を測る材料として、授業の中で使用するワークシートや学生の反応から自分が実施した授業を振り返るようにしている。特にワークシートにおいては、学生の学びや授業中の自身の考えが現れており、その授業においての課題を達成できているのかを知る手がかりになっている。その中で、自分が考えていたこととは異なる反応が出てくることもあり、「伝える」「教える」ということの難しさを実感することもあった。

赴任して1年目、学生の反応や理解度を汲み取りつつも、模索状態で授業を行ってきた。その中では、成果も多くあったが、同じくらいの課題も浮き上がってきた。その一つは、授業で学んだこと、考えたことをその先に活かすことができるのかという点である。つまり、学習内容と現場での活動が学生の頭の中でつながるのかということである。1年目は、授業を展開すること、そして授業準備で精一杯だった。授業が終わった後は学生の反応と記録等を照らし合わせながら課題を洗い出しはいたが、その次の段階である具体的な対策の検討・実施までには至らなかった。

学生には、講義・演習・実習を通して卒業後の環境においても、学んだことを糧に自信を持って現場へ出ていくことを期待している。そのためにも、専門分野において最新の知識を身につけるとともに、現場との繋がりを深め、新鮮な知識を学生に伝えていくようにしたい。また、学生に対して「伝える」「教える」という面においても、ただ知識を伝達するというのではなく、学生がその事に関して自分ごととして捉えられる、具体的なものとしてイメージができるといった授業を展開していくことも自分自身の今後の課題として考えている。

<特集2：新たな取り組み>

マイクロソフト Teams (Office365) の導入と今後の活用の可能性について

事務局長 矢澤庸徳

昨年からの新型コロナウイルス感染症対策のため、文部科学省高等教育局の調査によると、高等教育機関の遠隔授業は「全国ほぼ全て（98.7%）の大学等で実施又は検討をする」という状況でした（2020.04）。そのため、本学も4月から約1か月の休校措置をとり、授業は急遽、オンラインで行われることとなりました。各学科は、ZOOM、LINE、LINE WORKS、Teams、slackなどを活用して、学生に対し授業を行いました。

学内では、今後の教育環境の変化を見据え、「オンライン授業等の環境整備会議」が開かれました。その中で、「システムはある程度統一した方が良いのではないか」「個人情報や学内でやり取りされる内容に関し、セキュリティ的に安全性が高いシステムが良いのではないか」「学生の費用的な負担はなるべく抑えた方がよい」といった意見が交わされました。会議では、実際にいくつかのシステムを使用して、使い勝手や機能・安定性などの確認も行い、よりよいシステムはどれが良いか検討を行いました。

その中で、遠隔の会議・面談を行う場合、官公庁や企業ではセキュリティ面から Teams (Office365) を使用するケースが多くなっており、実際、学生の就職のオンライン面接は Teams (Office365) で行ってほしいと指定する自治体や企業もありました。また、姉妹校の飯田女子高等学校は、既に Teams (Office365) の導入をしており、利便性や拡張性の高さが評価されていました。また本年度は、通信内容の保護、保存容量の拡大、使用コストの削減等の理由から、本学のWEBサーバーの更新を行う計画でした。検討の結果、メールやスケジュール、コミュニケーションツール、ビデオ会議機能との連携が優れている、Teams (Office365) が導入されることとなりました。

Teams (Office365) は多機能で、操作がやや複雑な部分もあるため、「オンライン授業等の環境整備会議」では、Teams (Office365) 研修会（2021.1.6）を行うことといたしました。講師には飯田女子高等学校の三澤先生をお招きし、当日は教職員50名が第1パソコン教室で実際にパソコンを操作しながら、オンライン授業、チャット機能、小テスト機能など、基本的な使い方と活用例について研修しました。その後、一部、業務連絡や打ち合わせに Teams が使用され、学内研究集談会（2021.2.10）、FD・SD 研修会（2021.2.17）にも Teams が使用されるなど活用される場面が増えていきました。今後は、学生にもアカウントを配布し、急なオンライン授業にも対応できるよう準備を進めていきます。

Teams (Office365) は機能や拡張性が高く、将来は広範囲にわたって利用できる可能性を秘めています。例としては、授業の振り返りや小テストをオンライン上で行う、提出物をオンライン上で回収する、LMS (Learning Management System) を独自に作成して学生の自主学習を進め理解度を把握する、学生同士がオンライン上でグループワークをし、ファイル共有機能を用いて共同して一つの発表資料を作り上げる、などが考えられます。

また、教職員も紙資料だったものをオンライン上で見られるようにする、アンケートをオンライン上に作成して集計まで行う、オンライン会議を行う、といった用途が考えられます。

これからも予想できない環境や社会の変化が起こるかもしれません。我々教職員は今後も、教育環境の充実発展のため、柔軟にこのようなシステムを有効活用できるよう学びつづける必要があると感じています。



キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果

教務課長 山口正之

キャンパスライフに対するアンケート（令和2年度）をSD委員会が中心となり実施しました。調査方法については、オンラインを利用した4段階の選択。調査期間は令和3年1月20日～1月24日。質問内容は、『対象者の属性』『サポート体制』『教育施設・設備』『入学後の能力や知識の変化』『学生生活等の満足度』『教育への満足度』『学習時間』について調査を行いました。対象学生数は500名、回収数411、回収率82.2%（昨年度92.1%）でした。今年度、新型コロナウイルス感染症の影響により、学生は普段の学生生活を送ることができず、オンラインでの授業を実施したり、学外実習を学内実習に変更したりして授業を行ってきました。それに伴い今年度の調査方法についてもオンライン調査を実施することになりました。回収率が前年度を下回ったのは、オンライン調査にしたことが少なからず影響したのではないかと考えます。

今年度、新しい調査項目として「学生便覧の活用」について調査を行いました。学生便覧の活用状況については53.3%が活用していると回答しており、想像よりも活用されていない現状が調査でわかりました。今後、学生が活用しやすくなるよう掲載方法・内容の見直しを随時行い、学生便覧の作成を行っていききたいと思います。今年度の特徴として「能力・知識の変化」の中で昨年度より5ポイント以上向上した項目は、「理論的に考える能力の向上93.0（85.2）」「リーダーシップの能力の向上75.8（63.7）」「文章（レポート）を書く力90.0（84.7）」「本や資料などを読み解く力88.8（75.0）」「分析や問題解決能力の向上87.0（75.8）」

「プレゼンテーションの能力向上77.0（68.6）」「コンピュータなどの情報機器を使う力89.7（78.3）」「挑戦する力88.3（79.0）」「計画性・スケジュール管理能力89.5（82.7）」「社会に出る力91.4（81.2）」となっています。「コンピュータなどの情報機器を使う力」については、オンライン授業を行う機会があったので、学生の能力が向上したのではないかと考えます。「教育への満足度」について昨年度より5ポイント以上向上した項目は、「勉強や学習に関する支援やアドバイス87.0（81.8）」「資格取得や就職に関する支援やアドバイス89.5（84.4）」「クラブや同好会活動87.0（81.7）」となっており、就職支援など全体でのサポートができなかった分、個々での対応を行った結果なのではないかと考えます。また、クラブ活動の自粛制限がある中、クラブ・同好会活動に満足している回答が向上しており、他の大学では、活動自体行えなかったクラブ活動を、本学では実施できた事が理由ではないかと考えます。今後、学生の活動の場を広げる意味でも、クラブ・同好会活動をより一層充実させていきたいと思います。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症により今まで普通に行えたことが出来なくなり、対応に追われる1年となりました。また、オンライン調査の実施など、今まで出来なかったことが出来るようになるきっかけの年でもあったと思います。今後も、学生が本学に入学して満足できるよう、学校全体で新しい取り組みを行っていききたいと思います。

編集後記

FD通信13号をお届けします。お忙しい中、寄稿にご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。今回の特集では新型コロナウイルス感染症の影響を受けオンラインでの研修や授業についての取り組み、FD活動について取り上げました。各学科の情報を得る機会にさせていただけたらと思います。本通信で多くの情報が共有され、今後のFD活動がより充実したものになることを願います。
(編集担当：米山育子・遠山清香)

飯田女子短期大学FD通信 No.13（発行日 2021年3月31日）

FD委員会委員長 三浦弥生

委員 下島浩 竹村春香 田中住幸 遠山清香 山口正之 米山育子

※FD通信へのご意見ご感想をお待ちしております。 fd@iidawjc.ac.jp